

研 究 集 録

令和 4 年度

秋田県立角館高等学校

目 次

巻頭言

校 長 佐 藤 彰 久

【Ⅰ】 校内研修

第 1 回互見月間

第 2 回互見月間

【Ⅱ】 初任者研修

体育科 原 雄 太

校内研修実施状況

研修を終えて

【Ⅲ】 中堅教諭等資質向上研修

研修を終えて

英語科 大 塚 繁太郎

研修を終えて

地歴公民科 櫻 田 伸 吾

【Ⅳ】 指導主事訪問時研究授業研修会 (令和 4 年 1 0 月 1 8 日実施)

地歴公民科

授業者 山 内 孝 太

英語科

授業者 大 塚 繁太郎

体育科

授業者 田 口 忠 廣
藤 木 剛
原 雄 太

今年度は新学習指導要領の最初の対象学年がスタートした年である。前年度から本格的に準備を進めてきた観点別評価の実施、新たな教科「公共」への対応、「現代の国語」「言語文化」「歴史総合」等、新たな科目への対応にも迫られた1年であった。今年度実施した教職員への学校評価アンケートの自由記述の欄には「研修に関して、研究授業は年次研修以外の教員が行い、できるだけ多くの教員が研修するようにすべき」等の意見があり、新たな教科科目を指導するにあたって、授業力の強化に関心が集まっているように感じた。また、昨年度大幅に難化した大学入学共通テストへの対応に向けては、「その動向に注視してカリキュラムを運営することが求められる」「大学入学共通テストはどの科目も読解力が強く求められている。行間を読む力が不足していると言われている。表現力が重視されがちだが、読解力を付けさせる指導と研修が必要だ」等の意見からも、以前のセンター試験と同様の対策では不十分であるとの認識が高まっていることを感じる。問題が難化した昨年度の共通テストにおいても、上位層は比較的安定した結果を出していることから、それ以外の層に属する生徒に対する読解力強化は大きな課題である。多くの生徒がその層に属する本校にとっては、早急な対策の必要性を感じている。

そのような中、今年度の教員研修として特筆すべきは、目指す生徒像の共通認識に向けた検討会の実施であろう。昨年度の研修の成果として得られた生徒に身につけさせたい力「自立」「主体」「探究」「創造」を4つのキーワードとして今年度の重点目標に盛り込んだものの、このままではどのような生徒を育成すべきかは、教員それぞれのイメージによるとの意見が出された。そのため、誰もが具体的な姿をイメージできるよう「角館高校グランドデザイン検討会」と称したグループ協議を実施して、その統一化を図った。7月の生徒・教員を対象としたアンケートから始まり、その結果を基にした検討会を3回実施し、4つのキーワードごとに育成を目指す資質・能力を設定し、「自立」「主体」「探究」「創造」を身につけたそれぞれの生徒像を文章化できたことは大きな成果であると考えます。今後は、全教職員が同じ生徒像をイメージしながら共通実践し「轟々参天、国家棟梁ノ材」を目指して若杉のごとく成長する生徒、「清く賢く強い」生徒を育成していきたい。

さて、今年度の研究集録には、初任者研修及び中堅教諭資質向上研修に携わった3名の先生方の研修記録が収められている。職員会議の際にも研修報告をしていただいたが、成果を共有しながら共に知識・技術を高めていくことが教員団全体の力量アップにつながることから、是非この研究集録に目を通してほしい。また、教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律等が令和5年4月に施行することで新たな教員研修が始まる。それは自主的・主体的な研修であり、自らを評価し選択しながら研修していくことになる。管理職の助言を得ながら進める研修ではあるが、この研修本来の目的である自ら設定して研修に励む教職員が多数になり、研修成果を収める来年度の研究集録が充実したものになることを願っている。

結びに、この研究収録の原稿執筆者や編集に携わっていただいた先生方に感謝し、これまでの、そしてこれらの取り組みが本校生徒の育成に大いに寄与することを期待している。

令和4年度 第1回 互見月間

研修部

- 1 期 間 令和4年5月23日（月）～6月24日（金）
- 2 重点目標
教員相互に授業参観する事を通して、自らの授業を振り返り改善の手立てを考察する機会とし、個々の授業改善を図る。生徒が主体的に学ぶ姿勢を育てることを目指し、「考える時間」「相談する時間」「発表する時間」を設定した学び合い授業の展開を工夫する。
- 3 授業参観について
 - ・期間内は、必ず自教科と他教科を1クラスずつ参観すること。あらかじめ、「授業参観希望シート」を授業の担当者に渡す。
- 4 その他
 - ・授業参観後は「授業参観メモ」を授業の担当者へ渡す。

令和4年度 第2回 互見月間

研修部

- 1 期 間 令和4年11月1日（火）～11月28日（月）
- 2 重点目標
教員相互に授業参観する事を通して、自らの授業を振り返り改善の手立てを考察する機会とし、個々の授業改善を図る。生徒が主体的に学ぶ姿勢を育てることを目指し、「考える時間」「相談する時間」「発表する時間」を設定した学び合い授業の展開を工夫する。
- 3 授業参観について
 - ・期間内は、必ず自教科と他教科を1クラスずつ参観すること。あらかじめ、「授業参観希望シート」を授業の担当者に渡す。
- 4 その他
 - ・授業参観後は「授業参観メモ」を授業の担当者へ渡す。

令和4年度高等学校初任者研修「校内研修実施状況」

A 一般研修

学校番号(35) 学校名(秋田県立角館)高等学校

指導教員氏名(大越 晋子)

初任者氏名(原 雄太)

※指導教員が研修に同席した場合、同席の欄に○を記入する

各部	研修内容	担当者	同席	研修日	準備・事後の まとめ日	研修時間	
						時数	日数
学校管理	教員としての使命感・本校の教育目標と学校運営	校長		5月18日	5月18日	2	1
	本校の組織と服務規程	教頭	○	4月28日	4月28日	2	1
	諸表簿及び公文書の手引き	事務長		12月21日	12月21日	2	1
	危機管理体制とその在り方	教頭		12月23日	12月23日	2	1
総務部	学校行事と年間行事予定	総務主任		5月10日	5月10日	3	1
	P T Aの組織と運営	総務主任		1月24日	1月24日	2	1
教務部	本校の教育課程について	教務主任		8月30日	8月30日	4	1
	校内規定と評価、生徒指導要録の記入方法と取り扱い	教務主任		10月24日	10月24日	4	1
生徒指導部	生徒指導の現状と問題点	生徒指導主事		1月27日	1月27日	4	1
	問題行動の事例研究	生徒指導主事		2月2日	2月2日	4	1
特別活動部	特別活動指導の要点、生徒会活動の在り方	特別活動主任		8月29日	8月29日	3	1
進路指導部	本校の進路動向と進路指導の進め方	進路指導主事		7月7日	7月7日	3	1
キャリア国際部	キャリア教育の進め方	キャリア国際部主任		9月22日	9月22日	2	1
保健・特別支援教育部	保健室の利用状況と健康管理	養護教諭		7月21日	7月21日	2	1
	教育相談の進め方	保健・特別支援教育部主任		1月19日	1月19日	2	1
探究部	総合的な探究の計画と進め方	探究主任		4月13日	4月13日	3	1
図書・教育情報部	パソコンの教科的利用と個人情報管理	図書・教育情報主任		12月26日	12月26日	4	1
	学校図書の在り方と利用状況	図書館担当		9月16日	9月16日	2	1
研修部	初任者研修の意義と年間計画	研修部主任	○	4月14日	4月14日、15日	6	2
	初任者研修を振り返って	研修部主任		3月15日	3月15日	6	1
学年部	学年経営とホームルーム経営の在り方	2学年主任		6月17日	6月17日	4	1
	学級担任の実務と心構え	2学年主任		1月31日	1月31日	4	1
指導者が指導に要した年間時数・日数						70	23

令和4年度高等学校初任者研修「校内研修実施状況」

B 教科研修

学校番号(35) 学校名(秋田県立角館) 高等学校

指導教員氏名(田口 忠廣)

初任者氏名(原 雄太)

※指導教員が研修に同席した場合、同席の欄に○を記入する

各部	研修内容	担当者	同席	研修日	準備・事後の まとめ日	研修時間	
						時数	日数
保健体育	授業参観と研究協議Ⅰ	教科指導員	○	4月13日	4月13日、14日	6	2
	授業参観と研究協議Ⅱ	教科指導員	○	9月20日	9月20日、22日	6	2
	授業参観と研究協議Ⅲ	教科指導員	○	12月8日	12月8日、9日	6	2
	研究授業と研究協議Ⅰ	教科指導員	○	6月14日	6月7日、9日、13日、14日、16日	10	5
	研究授業と研究協議Ⅱ	教科指導員	○	10月18日	10月11日、13日、14日、17日、18日	10	5
	研究授業と研究協議Ⅲ	教科指導員		2月15日	2月14日、15日、16日、17日、18日	10	5
	師範授業	教科指導員	○	4月12日	4月13日、14日	4	2
	年間目標と年間指導計画	教科指導員	○	4月20日	4月20日、21日	6	2
	評価方法と評価基準①	教科指導員	○	7月6日	7月6日、7日	3	2
	評価方法と評価基準②	教科指導員	○	12月9日	12月9日、10日	3	2
	学習指導案の作成①	教科指導員、保健体育科	○	6月7日	6月7日、9日、10日、13日	5	4
	学習指導案の作成②	教科指導員、保健体育科	○	10月5日	10月5日、6日、7日、11日	5	4
	学習指導案の作成③	教科指導員、保健体育科		2月7日	2月7日、8日、10日、14日	5	4
	考查問題の作成と検討①	教科指導員、保健体育科	○	6月21日	6月21日、22日、24日	4	3
	考查問題の作成と検討②	教科指導員、保健体育科	○	11月22日	11月22日、24日、25日	4	3
	教材研究の方法と実際	教科指導員	○	10月25日	10月18日、25日、27日	4	3
	個に応じた学習指導の工夫	教科指導員		1月13日	1月13日、16日	3	2
	生徒の活動と学習形態の工夫	教科指導員	○	10月4日	10月4日、11日	2	2
	導入の工夫と授業構成	教科指導員	○	10月13日	10月13日、14日	2	2
	生徒の運動能力の実態把握(スポーツテストの結果)	教科指導員	○	9月13日	9月13日、14日	2	1
	教科指導と教育機器の活用	教科指導員	○	11月28日	11月28日、29日	4	2
	年間の教科研修の成果と課題	教科指導員、保健体育科		3月16日	3月16日、17日、18日	6	3
指導者が指導に要した年間時数・日数						110	62

令和4年度 初任者研修を終えて

保健体育科 原 雄太

・はじめに

この一年間の研修を通して、多くのことを学ぶことができた。その中には、新たな発見や気づき、これまでの自分の教職経験やキャリアとリンクさせて考え直したことなど、本当に様々なものがある。研修が始まるまでは不安に思うこともあったが、まもなく一年を迎えようとしている。ただし、それは紛れもなく周囲の先生方の温かい支えのおかげであり、ただただ感謝の気持ちでいっぱいである。

そして、今回は研修の中でも特に印象的であった「授業研修」について、その感想を報告として記載させていただく。なお、本研修は令和4年10月12日、秋田県立秋田明徳館高等学校で開催されたものだ。

・「授業研修」

秋田明徳館高等学校で開催された「授業研修」では、講話や授業参観、全体協議の他に、生徒の「生活体験発表会」に参加させていただいた。以下は、その発表会を終えての感想の一部である。

発表会では、いじめや不登校といった様々な経験を乗り越え、夢に向かう姿や現在の心境について、生き生きと語られていた。中学校卒業時の進路選択から家族の過干渉に悩むが、いまは自分で決めた進路に向けて頑張っている生徒、幼少期に父と祖母を亡くし、祖父と弟の3人で暮らしながら進路目標を決めた生徒、定時制で陸上競技と出会い、全国大会で入賞した生徒、周りが投げかける言葉に悩み不登校になったが、定時制で信頼できる友人や先生に出会い、前向きに生きることを決めた生徒、自己肯定感の低さは周りの責任ではなく、自分の考え方を変えることが必要だと気づいた生徒、全日制から定時制に編入し、人生を再スタートするために生徒会に入ったりアルバイトを始めたり、様々なことに挑戦している生徒、急に理由もなく不登校になったが、友人の一言に救われ、いまは保育士になる夢を見つけた生徒、定時制に変えたことで生活のリズムが整い、趣味にしていた絵画やゲーム制作にやりがいを見いだすとともに、自分の意見を伝えること、自分の表情を意識することなど、自分も変わることに気づいた生徒、すべてが大変貴重で、心に響く発表だった。

共生社会と言われて久しくなったが、生徒の発表を聞くとまだまだ偏見や差別があるのではないかと考えた。純粋に、今日の発表を自校の生徒にも聞いてもらいたいと思ったし、それが他者理解につながることに、自分の考え方や日々の人間関係を考え直すきっかけになると考えた。全日制が「ふつう」でも、定時制が「ふつう」でもなくて、みんながお互いを認め合い、支え合えることが大事だということを、授業や学校行事、部活動等を通して、改めて生徒に伝えていきたい。発表会での学びを、日々の現場で活かすことができるように努めていきます。

・おわりに

研修を通して、また、これまでの自分を振り返りながら、自分はこれから一教職員として「どうあるべきか」と「どうありたいか」を考え続けてきた。その方向性を再確認することができたとともに、今後も学び続ける姿勢をもった教員でありたいと強く思った。最後になりましたが、佐藤彰久校長先生、栗原涉教頭先生をはじめ、指導教員である大越晋子先生、教科指導員の田口忠廣先生や保健体育科の先生方、ご協力いただきました多くの先生方に感謝いたします。また、今後ともご指導よろしく願いいたします。

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所属長	角 館 高等学校	職・氏名	教諭 大塚 繁太郎			
研究内容	A:本県の教育課題に関する研究 C:生徒指導に関する研究 E:道徳教育に関する研究 G:総合的な探究の時間に関する研究 ①:その他					
研究テーマ	教育の在り方と脳科学					
1 研究の概要 これから社会には凸と凹の関係が成り立つ共同体が必要である。一人の人間が全てのことをできる必要はなく、できない部分は誰かに補ってもらえる関係作りが求められる。その目的に向かい教育がしなければならないのは、自律した生徒を育てることである。先行きが不透明な時代になり、自ら目標を設定し、その目標を実現するために他者と試行錯誤ができる資質を求められるようになった。その中で脳科学は注目すべき分野である。脳の仕組みを知り、うまくいかないことは止めて、新しく分かったことに取り組みれば、自律し、自ら進んで行動できる若者を育てることができる。						
2 成果と課題 (1) デフォルトモードネットワーク (Default Mode Network) 人間それぞれにやりなれた思考パターンや言動パターンが存在し、その人の脳にとってエネルギー効率が抜群にいい思考回路が存在する。良くも悪くも多くの場合それを活用するようになっている。他の新しい回路を作るには莫大なエネルギーがかかり、意識と注意、そして時間が必要になる。 慣れ親しんだ思考パターンや言動パターンが人生を育むうえで良い方向に機能しているのであれば問題ない。しかし、学校現場で生徒は、常に「受け身」である。どこか人の目を気にし、怒られないように無難に振舞っているように見える。つまり、DMNの観点からすると逃避モードに入っているのが大半であることがわかる。学校の生活を振り返ってみると、講義式の授業、黙食、整容、大量の宿題、テストなど様々な“やらされ命題”が存在する。そうすると、普通の生徒ならば、従順になり、怒られないように命題をこなそうとし、受け身の思考回路に慣れ親しむことになる。DMNの仕組みからすると、その思考パターンは非常に使いやすい。そうすると、自身の意志とは逆に常に受け身になり、そこから抜け出せなくなるのも納得できる。 この傾向を変えるには、本人の意識もさることながら、教員の協力も不可欠である。ここでも凸と凹の関係が重要である。一つ目は、生徒に自己選択権を与え、「失敗の中から学ぶ、失敗しても大丈夫」という環境をみんなで作っていく。できるだけおせっかいはしない。言いたいことがあっても頭ごなしに否定しない。生徒自身に取り組ませ、「失敗はしたが自分なりに工夫できた、やり遂げた」という体験を積ませる必要があるからである。二つ目は、生徒に時間を与える。学校に拘束される時間があまりにも長く、自分を振り返る余裕もない。確かに、「課題を出さないと勉強しない」という方もいるかもしれないが、生徒自身が自分で選び、失敗を自分で受け止める方が、自律に向かって成長する過程としては有効だと私は思う。						
(2) ネガティブバイアスに陥りやすい脳 人間は本来、ネガティブであり、自分や他人の粗探しをする生き物である。それは、脳の本来の危険検知能力である。さらに、ポジティブなことを自動検知する機能はないことが分かっている。よって、脳は、常にネガティブな記憶や感情を選択する癖がある。 この観点に関して、大人の行為が問題となる部分である。「頭ごなしに否定する。」「頭ごなしに叱る。」といった支配的行為が児童・生徒を心理的危険な状態に陥れるということを理解しなければならない。DMNでも述べたように、一度作られたネガティブ思考を直すには、多大な意識と時間がかかるため、普段から生徒の行動						

評価を正しく行う必要がある。大事なのが、結果を誉めずにプロセスを誉めることである。自主的に取り組んだことを誉めるなどどんな些細なことでも善い行動や善いプロセスは正しく評価すべきである。行動を直すことで、生徒は自己肯定感を少しずつ育み、自律に向かって成長する。心を直すことは不可能であるため、行動を直してあげる方が理にかなっている。今後は、生徒のファシリテーター（伴走者）になることが教員の役目になるかもしれない。そして、生徒と共に先生も充実感を共有できる共同体ができたらうれしい限りである。

（３） メタ認知能力

メタ認知能力とは、複数の観点から自分を知り、自己について学ぶことである。メタ認知能力の高い人ほど自分の特性や癖を正確に理解しているため、目標設定能力や問題解決能力が高いと言われている。メタ認知能力が低い人ほど他責になることも分かっている。また、他責は成長の過程で培ったものである。

現状で、メタ認知能力は、現代の生徒達に備わっていないことの方が多い。原因は、物理的に時間がないということである。自己を知るということは、非常に高度な脳機能であり、時間と意識が多にかかる。まずは、生徒たちに時間的余裕を与えるべきである。自分と向き合う時間の重要性については、国内外を問わず多くの起業で、瞑想やマインドセットなどを取り入れていることから言うまでもない。世界から見て、当事者意識の低い日本の高校生にとってメタ認知能力の開発は必須事項である。

教育でできることは、二つ。一つ目は、生徒への拘束時間を制限する。授業、課題、テスト、部活、社会貢献活動、塾、家庭の時間と忙しすぎる。これでは自分と向き合う時間を確保することは不可能である。できるだけ削減すべきである。そうすることで先生方の負担も減らすことができる。効果のないことをやめる決断が大切である。二つ目は、生徒に本人なりの物差しを複数持たせることである。生徒それぞれが大切にしていることや得手不得手など生徒が獲得してきた物差しを尊重する。こういったことが実践できれば、生徒は自律して行動できるようになってくる。歯車がかみ合いだせば黙ってでも学んでいく。グローバル社会の中で成長できていない日本社会において、そういったサイクルを作り、互いに助け合いながら自分なりの生き方を見つけられる生徒を増やすことが日本の生産性を高める大きな一歩となることは間違いない。

（４） ドーパミン（やる気スイッチ）

脳の発達と深い関係があるのが運動である。運動後にはドーパミンとエンドルフィンが脳から出されるため、集中力、発想力、記憶力など様々な良い効果が生まれることが分かっている。これは太古の昔狩猟民族として進化を遂げてきた人類の本能である。ドーパミンは新しいもの好きなことも重要である。

しかし、日本の教育で、このドーパミン性のモチベーションを活用できる場面は皆無である。生徒の「やりたい」「どうしたいか」が大人の都合で無視される場面があまりにも多く、「あれをしなさい」「これをしなさい」と口うるさく言われることが多いため、自ら行動するのをあきらめている。大人が「よくなってもらいたい」と思う気持ちはよくわかる。しかし、生きていくのは生徒自身であり、生徒自身が自ら行動し経験を積んでいくのだから、「やりたい」という思いと自己決定権は大切にすべきである。

座りっぱなしの授業、勝利至上主義の部活動などこれらの取り組みでドーパミン性のモチベーションが得られるのかは疑問である。最近の運動会やクラスマッチも盛り上がり欠けるのもこのドーパミン不足が引き起こしているように思える。これらもやらされ命題だからある。企画、運営すべてにおいて生徒に託してみてもどうだろうか。失敗してもいいという環境さえあれば、生徒は様々なことを学びながらやがて、学校や社会を驚かす大きなことをやってのける。ここでも大人は一步下がって、伴走者としての役割を遂行すべきだと思う。授業も学び合いの時間を設けてもいいのではないか。学年を混ぜて授業をする時間もあってもいいと思う。新しいことに挑戦すれば、先生も生徒もドーパミンに駆り立てられ、思わぬ好結果を手にとれると思う。

３ まとめ

これまでの教育の功績は偉大である。しかし、時代が変わった。求められる能力も激変した。これまで通りは通用しないという立ち位置を確認すべきである。効果のないことをやめる勇気を持ち、教育が新しい価値を作り出すためにも、人間の発達を科学的知見からも認識する必要がある。日々学びである。これは教育に携わるすべての人の使命だと思う。教育は、時代の最先端であるべきであり、社会を変えるピボットである。

1 研修について

教育課題対応、マネジメント能力、生徒指導力、教科指導力、選択研修など様々な視点から研修を受け、教育に携わる人間として新たな目標を設定することができた。特に、学校運営に関わることが意義深かった。問題意識を高く持ち、減らせるものは減らすという観点が必要になると感じ、人任せにはできない分野であった。また、他校での授業研修や企業での選択研修は、普段の業務では経験できないことが多く、新たな発見があった。全体を通じて、研修の内容がバラエティーに富んでおり、参考になる研修が多かった。

2 研修を終えて

教科等の指導力養成研修では、ただ時間を過ごすのではなく、お互いの技量の向上のためにアイデアを出し合い、問題点や解決策までお互いに提示し合えたことがモチベーションを高める要因となった。良い仲間と出会えたことがこの10年で大きな財産となっている。

学校運営に関する研修では、学校の問題点や時代観というものを考えさせられた。時代が変わり、生徒自身が身に付けなければならない力も変わった。社会不安も増加し、先が見通すことが難しくなった。そして、不登校の生徒や自殺する若者が増加し、学校を取り巻く環境も不安定になっている。そんな状況下で、中堅教諭として何を提案すべきなのか、何を選択し何を諦めるのかを見定めなければならないと感じた。時代に合った目標設定というものが大事であると同時に、自己決定権は生徒にあるという観点が非常に大切になる。これからは価値観も多様になり、自己決定という機会を設けなければ、個人が成長する機会が失われてしまう。教員の考え方の変容のためにも定期的な研修は必要になる。

もう一点、オンラインの必要性にも触れておきたい。使いこなせないからやらないではなく、やりながら学んでいく姿勢が必要です。今後は移動の時間の節約、経費の節約、事故等リスクの低減等を考えるとオンラインでできるものは積極的にオンラインで行うという方針に転換すべきである。今年度良い取り組みが行われたことを紹介したい。中堅教諭等資質向上研修講座では、一度オンラインで研修が行われたが、グループで意見をまとめる機会や、全体で発表を行うという機会が設定され、活気のある講座が展開された。指導して下さった方々のチャレンジが大きな成果となって現れた貴重な時間であった。こういった取り組みは今後も続けられるべきであり、学校業務のDX化を進め、大きな負担軽減に繋げ、教育の質の向上に取り組まなければならない。

最後に、教育は時代の最先端であるべきである。なぜなら、未来を作るのは生徒たちであり、その最先端技術や哲学などの素養は、学校で培われるものだからである。しかし、残念ながら現在の教育はそうっていない。世界から乖離している部分も多い。その現状を真正面から受け入れ、研修などを通じて、マインドセットし直す必要がある。

私は、教育の可能性を信じている。だからこそ、今後も多くの研修に取り組み、自分自身を変え続けていきたい。

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所 属 校	秋田県立角館 高等学校	職・氏名	教 諭・櫻田 伸吾
研 究 内 容	A：本県教育課題に関する研究 C：生徒指導に関する研究 E：道徳教育に関する研究 G：総合的な学習(探究)の時間に関する研究 ①：その他 B：マネジメントに関する研究 D：教科指導に関する研究 F：特別活動に関する研究 H：特別支援教育に関する研究		
研究テーマ	少子化の中での部活動の在り方 ～合同チームを結成して～		
1 研究の概要 私が顧問する角館高校サッカー部では部員不足で大会に出場できないことを避けるために、昨年度の秋の新人戦から西仙北高校と大曲農業高校との合同チームを結成した。今年度もそれを継続し、さらに秋の新人戦からは横手清陵学院高校もこの合同チームに加わった。部員不足に伴う合同チームの結成は、秋田県が抱える少子化の影響を大きく受けている。今後もサッカーの競技に限らず合同チームの数は増えていくことが予想される。一年を超える合同チームの活動から見てきたものを他校の顧問や生徒の意見などを集約しまとめることで、今後より良い環境を生徒に与える手立てに貢献できればと思っている。 2 成果と課題 ①秋田県高体連サッカー専門部での合同チームの大会参加に関する基準について ・部員数10人以下のチーム同士、登録人数は25人まで。 ・原則として同地区、定期的に練習ができること。 ②合同チームの大会結果 ・令和3年度県南新人 第3位 ・令和3年度全県新人 初戦敗退 ・令和4年度県南総体 第3位 ・令和4年度全県総体 2回戦敗退 ・令和4年度全国高校サッカー選手権大会秋田県大会 3回戦敗退 ・令和4年度県南新人 第4位 ・令和4年度全県新人 初戦敗退 ③他校顧問へのアンケートから ○利点 ・部活動を通してでしか出会えなかった生徒同士の交友関係が広がる。 ・価値観が違う生徒同士のコミュニケーション能力や表現力、協調性が育つ。 ・生徒、顧問とも新たな価値観が養える。 ・人数が増えることで練習のバリエーションが増える。 ・中学校時代のチームメイトと他校にいても同じチームで試合ができる。 ・レギュラー争いなど競争意識が高まる。 ・知識力や技術力の底上げができる。 ・他校交流が増え情報共有、各高校との違いがわかる。 ・指導者の人数も増え、目が行き届きやすくなり、事故が起きにくい、起きてても迅速に対応できる。 ・他校を知ることで個々のチームの弱点を克服しやすくなる。 ・各学校の強みを活かした練習、試合ができる。 ○欠点や課題 ・学校行事や考査期間等で練習予定が合わない時がある。 ・戦術など連携の練習が、限られた時間でしかできない。 ・保護者の送迎などの関係もあり、練習場所の確保が難しい。			

- ・試合に出場できる時間が短くなる選手や試合に出られない選手も出てくる。
- ・単独チームより意思統一が弱い。
- ・各学校での部員のモチベーションの維持の差が単独チームより大きい。
- ・コロナ禍においては、感染リスクが増したり、大会に出場できなくなったりする場合がある

④生徒(選手・マネージャー)へのアンケートから

○利点

- ・指導者が多く、様々な視点から指導を受けることができ良い刺激となった。
- ・コミュニケーション能力が向上した。
- ・練習の幅が増え、練習メニューのマンネリを防ぐことができる。
- ・新しい指導者と出会うことで、サッカーの考え方を考えることができた。
- ・一緒のチームとしてプレーし、他校の選手から学べることもある。
- ・人数的な部分だけではなく、単独チームでは不足する部分を補える。
- ・他校の指導者や生徒の話の中から、新たな価値観を見いだすことができる。
- ・他校のマネージャーがいてくれたおかげで、仕事が捗った。
- ・体力を使うサッカーにおいて、ベンチに控え選手がいることは強みとなる。
- ・他校の保護者の方に助けられたこともあった。
- ・人数が多いと精神的な余裕が生まれ、楽しい活動になる。

○欠点や課題

- ・合同で行う練習時間が限られているため、他校の選手の特徴が十分に把握できない。
- ・試合中の動き方が食い違う場面が多くあり、日頃のコミュニケーションの大切さを感じた。
- ・遠慮から声が出ない場面が増える。
- ・サッカーに対する考え方や思いが各高校で違っていた。
- ・「チームのために」という意識の低下があった。
- ・チーム戦術の練習が単独チームに比べて圧倒的に少なく組織的なサッカーが難しい。
- ・意見が多く出て、それらをまとめるのが大変である。

⑤まとめ

合同チーム結成当初は大会に出場できる安心感とそれに伴うやる気を見せていたが、やはり活動の限界を感じる事が多く、それは生徒のモチベーション低下につながったことは明らかであった。平日を利用した合同練習は難しく、選手のコンディションには差が表れ、他校の選手の体力不足にストレスを感じる生徒もいた。やる気に対する差も見られ、実際に練習や大会に参加しなくなる生徒もいた。チームとしての方向性や目標を定めるのが非常に難しく、他校の生徒の人間的な特徴をつかめていないため、声かけを通してチーム全体の規律を整えることが難しい場面もあった。また、合同チームが勝ち進むことに違和感を覚える単独チームの指導者や保護者がいたことも事実である。

今年度、全国高校サッカー選手権大会秋田県大会への参加チーム数は23チームと非常に少ない数であった。11人が試合に出場するサッカー競技の特性からしても少子化の影響は受けやすい。生徒の大会参加の確保や参加チーム数を維持することを考えると、合同チームの結成はプラスになると思うが、様々な課題を克服する方策が必要となってくるだろう。

一年を超える活動やアンケートからも顧問と生徒、両者にとっても利点が多くあることは理解できた。しかし、欠点や課題を早急に解決していかななくてはならないし、乗り越えられないだろう課題があることも理解した上で活動する必要もある。「生徒のため」この言葉が一人歩きしないように、本当に合同チームでの活動が「生徒のため」なのかを考え直すことが必要である。本気で真剣にスピード感を持って取り組んでいく必要性を強く感じている。

中堅研修を終えて ～10年前と今と10年後～

櫻田 伸吾

時代の変化は著しい。10年前に生徒がタブレットを駆使しながら授業を受けることは想像外であった。ということは、10年後の教育の姿を想像することは非常に難しい。しかし、時代の変化に応じて教育のあり方も変化していく必要があり、教師も柔軟に対応していく必要がある。昨今話題になっている教師の働き方も見直していく必要もあると思う。現状の働き方で、生徒に対し教員という仕事が素晴らしくて、「是非教師になってください」とは言えない。これは、非常に心苦しい。

SNS が普及した現代では、白黒はっきりする風潮が見られる。この風潮は少なからず教育にも影響を及ぼしている。SNS では白は黒を攻撃し、黒は白を攻撃し、自分と異なる考え方を持つ者を敵と見る。グレーで良いことが多い世の中で、白黒をはっきりしない者を判断のできない人と決めつけて攻撃することもある。教育で大切なことは、グレーの中から白か黒かの判断を生徒にさせるべきことだと思う。教師(大人)が白黒を生徒(子ども)に対してはっきりさせる必要はない。当然、白でも黒でもグレーでもない考え方があっても良い。それこそが現代求められている多様性だと思うし、そうした人間が世界を変えていく人材になっていくこともある。

「生徒のために」との考えから時間も気にせず教師が働き続ける時代はとっくに終わっている。「生徒のために」やらないことを選択することが本当の意味で「生徒のために」なることも多くなっていると感じる。時代が自主や自立、自主性を求めているのであれば、教師が生徒に手をかけ過ぎないことが大切である。生徒のために身を粉にして働くことを時代は求めていない。そして、教師が生徒に対して「あれをやれ」「これをやれ」と指示ばかりする時代もとっくに終わっている。その指示をやらない(やれない)生徒を悪い生徒としてのレッテルをはる。自分はこれぐらいやったのだから生徒はそれに応えて当然だとの考え方が、やらない(やれない)生徒に対する威圧的な態度となってあらわれる。悪いのは、自分の伝え方であることに気付かないから、体罰的なものは教育の中からなくなる。

Society 5.0 の時代はもうそこまできている。様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、解決困難と言われていたような課題や困難を克服していく。また、AI により必要な情報が必要なときに提供されるようになっていく。社会の変革を通じて、これまでの閉塞感はある程度、打破されていくと思う。多くの仕事が AI に置き換わることは容易に想像できるが、その AI がどの程度発展し、どう使用されていくのかは想像できない。教育の中で AI がどう影響を及ぼすのかも不確定である。AI と共存しながら生きていく人々の生活様式はどうなっていくのだろうか。教育の姿はどうなっていくのだろうか。

私は人間の労働時間は急速に短縮され则认为している。一日五時間程度、週に働く日数は三日程度になると思っている。さらに、科学技術の発展によって睡眠の質が劇的に良くなると、睡眠時間も急速に短くなることも考えられる。その中で余暇時間、自分のために使う時間が大幅に増えてくるものと予想ができる。その時間の使い方に未来へのヒントがあると思う。でも、何もわからない。わからないから面白い。

教育は正解を教えることではない。この考えを時代が変化しても変えずに持ち続けながら、時代の流れに遅れることのないように今後も教育に携わっていきたいと思う。

日 時：令和4年10月17日（月）3校時
 場 所：角館高等学校第一体育館・第二体育館
 対 象：2年CD組 68名（バレーボール選択者 26名）
 授業者：原 雄太、田口 忠廣、藤木 剛

1. 単元名 選択球技（ゴール型：バスケットボール ネット型：バレーボール、卓球）

2. 単元の目標と評価規準

- 【目 標】 ア. 勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めて、ゲームが展開できるようにする。 (技能)
- イ. 球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。 (態度)
- ウ. 技術などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解し、チームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。 (知識、思考・判断)

【評価規準】

関心・意欲・態度 (A)	思考・判断 (B)	運動の技能 (C)	知識・理解 (D)
- 球技の学習に主体的に取り組もうとしている。 - 役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 - 合意形成に貢献しようとしている。 - 互いに助け合い高め合おうとしている。	- 課題解決の過程を踏まえて、取り組んできたチームや自己の目標と成果を検証し、課題を見直している。 - 作戦などの話合いの場面で、合意を形成するための調整の仕方を見付けている。	- ゴール型では、空間への侵入などから攻防を展開するための状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの動きができる。 - ネット型では、空間を作りだすなどの攻防を展開するための状況に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きができる。	- 技術などの名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 - 課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。

3. 単元計画（本時6時間目／10時間）基本練習3、課題練習3、ゲーム4

4. バレーボール：本時の計画

- (1) 本時の目標：スパイク動作のポイントを意識し、正しいフォームでスパイクを打つことができる (技能)
- (2) 生徒の実態：基本的な技能に個人差はあるものの、バレーボール経験者がリードしながら楽しむことができる。
- (3) 学習の展開 (55分)

	学習活動	指導上の留意点	評価 (方法)
導入 8分	- 集合、挨拶、準備運動をする。 - コート設営と用具の準備をする。 - 本時の目標と展開を確認する。	- 準備運動を確実に行わせる。 - スパイク動作のポイントを考えさせ、全体で共有する。	
展開 40分	- 円陣パス、三角パスの練習をする。 - スパイク練習 - チーム毎にスパイクの動画を確認し、目標に対しての振り返りをする。その際、良かった点と課題について話し合い、ジャムボードに入力する。 - ゲームを行う。	- 安全に留意させる。 - 空いているチームの人が、動画の撮影、ボール拾いなどの役割をするように伝える。 - 積極的に話し合いに参加させ、意見交換させる。 - スパイク動作の良かった点や課題を意識しながらゲームを行わせる。	【技能】(C) スパイク練習とゲームの中で、スパイク動作のポイントを意識してスパイクを打つことができる (観察評価)
整理 7分	チーム毎に本時の振り返りをする。	チーム毎に本時の振り返りをさせ、全体で発表させる。	

日 時：令和4年10月27日（木）4校時

場 所：角館高等学校・2年E組

対 象：2年E組 28名

授業者：原 雄太

1 単元名 (2) 生涯を通じる健康 ア 生涯の各段階における健康 (ウ) 加齢と健康

2 単元の目標

(1) 生涯を通じる健康について、生涯の各段階における健康課題への自らの適切な対応及び我が国の保健・医療制度や機関の適切な活用が重要であることに関心をもち、学習活動に意欲的に取り組もうとしている。

(関心・意欲・態度)

(2) 生涯を通じる健康について、生涯の各段階における健康課題の解決を目指して、知識を活用した学習活動により、総合的に考え、判断し、それらを表している。

(思考・判断)

(3) 生涯を通じる健康について、生涯の各段階における健康課題の解決に役立つ自らの適切な対応及び我が国の保健・医療制度や機関の適切な活用のための基礎的な事項を理解している。

(知識・理解)

3 単元計画

第1時	第2時（本時）	第3時
加齢と健康	高齢者のための社会的取り組み①	高齢者のための社会的取り組み②
○資料を探したり、見たり、読んだりするなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	○生涯にわたって健康を保持増進するには、生涯の各段階の健康課題に応じた自己の健康管理及び環境づくりが関わっていることについて、理解したことを発言したり、記述したりしている。	○資料等で調べたことを基に課題を見付けたり、整理したりするなどして、それらを説明している。

4 単元と生徒

(1) 単元観

本単元「加齢と健康」は、「思春期と健康」、「結婚生活と健康」の3項目で構成されている大単元「生涯を通じる健康」の単元の一つである。その中で、「加齢と健康」は、中高年の健康状態、生活状況やこれらに対する種々の施策が行われていることを取り上げるとともに、高齢社会の到来に対応して、保健・医療・福祉の連携と総合的な対策が必要であることを理解できるようにする単元である。

(2) 生徒観

真面目な生徒が多く、落ち着いた雰囲気です授業に取り組むクラスである。グループ活動等をとおして、積極的に意見交換ができるようになってもらいたい。

(3) 指導観

保健の見方・考え方を働かせて、より深い学びの視点で指導するためには、習得した知識を活用し課題に対して具体的な解決方法を考えたり、他者との意見交流をはかる中で自他の意見を比較したりし、学習と生活が密接であることを押さえる必要があると考える。

そこで本時は、身近な場所や物を活用しながら、すべての人が暮らしやすい社会づくりや環境づくりがされていることを、グループワークなども通して理解させたい。また、来月予定されている修学旅行でさらに深い学びになるようにしたい。

5 本時の計画 (2/3)

- (1) 内容：我が国の高齢化の実態を知るとともに、すべての人が暮らしやすい社会づくりや環境づくりを考える。
 (2) 目標：身近にあるバリアフリーやユニバーサルデザインに配慮したものを見つけたり、新たに考案したりしたことを、自分の言葉でまとめることができる。(知識・理解)

(3) 展開

	学習活動	指導上の留意点 (教師の支援)	評価 (方法)
導入 8分	1. 前時の復習をする。 2. ユニバーサルデザインを理解する。 発問：角館高校には、バリアフリーやユニバーサルデザインに配慮したものはあるのだろうか？	・バリアフリーとユニバーサルデザインの違いを理解させる。また、クイズを何問か提示し、身近なものであることを気づかせる。	
展開 40分	1. 学校を散策し、バリアフリーやユニバーサルデザインを見つける。 2. 学習シートに、学校にあるバリアフリーやユニバーサルデザインについてまとめる。 3. グループワーク ①グループ内で一人一人が2. でまとめたことを発表する。 ②代表は全体に発表する。	・散策する際は、安全に留意させる。 ・学校にあるバリアフリーやユニバーサルデザインを見つけ、タブレット端末で写真を撮らせる。 ・新たにバリアフリーやユニバーサルデザインが取り入れられないかという視点でも、散策させる。 学校で見つけたバリアフリーやユニバーサルデザインについて、学習シートにまとめている。また、新たに考案したことも学習シートにまとめている。 ・発表の際は、タブレットに撮影した写真を提示しながら発表させる。 ・他者の発表を聞いて、良かった点や新たに気づいた点などを学習シートにメモしながら聞くようにさせる。	【知識・理解】 (学習カード)
整理 7分	1. 本時のまとめをする。 発問：いままで見たことがなかったバリアフリーやユニバーサルデザインはあるのだろうか？ 2. 学習したことを踏まえて、学習シートに感想を記入する。	・修学旅行の課題として、いままで見たことがなかったバリアフリーやユニバーサルデザインを見つけて、写真などを撮ってくるようにさせる。 ・次時の学習内容を伝え、見通しをもたせる。	

地理歴史科（歴史総合）学習指導案

日 時 令和4年10月18日（火）6校時
 対象クラス 1年C組 33名
 場 所 1年C組教室
 授 業 者 教諭 山内 孝太
 使用教科書 『高等学校 歴史総合』（第一学習社）

1 単元名

第1章 近代化と私たち 第4節 アジア諸国の変貌と日本の開国

2 単元の目標

中国の開港と日本の開国の背景や影響などを基に理解するとともに、アジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、アジア各地域間やアジア諸国と欧米諸国との関係などを多面的・多角的に考察し、表現できるようにする。

3 単元の教材観

産業革命以来の欧米列強による本格的なアジア進出に際し、東南アジアや南アジアが次々と植民地化されていくなか、西アジアや東アジアの国々は近代の科学技術の導入と国民国家の形成を目指すことで、これに対抗しようとした。日本においては、「富国強兵」のスローガンのもとで明治政府主導の近代化がすすめられた一方で、自由民権運動を通じて立憲政体が確立された。本時は、日本と他国の改革を比較することで、日本の近代化が「上からの改革」と社会運動に起因する改革の両側面がみられることを理解させたい。

4 単元計画（全6時間）

1 オスマン帝国の衰退と西アジア …1/6 3 東アジアの動揺 …3/6 5 明治初期日本の外交と東アジアの国際秩序…5/6
 2 南アジアと東南アジアの植民地化…2/6 4 東アジアの情勢と改革…4/6 6 日本の立憲国家への道のり（本時） …6/6

5 単元の評価規準

知識・技能 (A)	思考・判断・表現 (B)	主体的に学習に取り組む態度 (C)
列強の進出と植民地の形成などを基に、列強の帝国主義政策とアジア諸国の変容を理解している。	アジア諸国とその他の国と地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなどして、多面的・多角的に考察している。	よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究しようとしている。

6 生徒観

集中して真面目に授業に取り組むことができる一方、積極的な発言等は苦手であり、授業に向かう姿勢は受動的な傾向がある。クラス内での学力差も大きいので、適宜小集団での協働を取り入れながら授業を進めることで、主体的な学習を促したい。

7 本時の指導目標

憲法の比較を通じて、日本の近代化についての思考を深めさせる。

8 指導過程

過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 (10分)	本時の学習内容の確認	・本時の目標を記入する。 目標：憲法から日本の近代化の特徴を考察する。 ・近代化政策について、日本（明治維新）、オスマン帝国（タンジマート）、清（洋務運動）の概要を確認する。	・比較できる表を提示する。 ・質問を通じて既習内容を想起させる。	
展開① (10分)	自由民権運動	・自由民権運動の過程について説明を聞き、理解する。	・年表を活用し簡潔に説明する。	
展開② (25分)	明治憲法	Q. 3つの憲法にはどのような違いや共通点があるだろうか？ ・ミドハト憲法、アメリカ合衆国憲法とそれぞれ比較し、共通点と相違点をグループ内で共有する。 ・共通点・相違点の背景を考察する。 ・日本の近代化が「上から」か「下から」かを自分なりに判断し、評価する。	・比較しやすい条文を選んで提示する。 ・グループ内で分担して学習に取り組ませる（ジグソー法）。 ・欽定憲法と民定憲法の違いを理解させる。 ・google formsを活用して個々の評価を共有する。	・憲法の比較を基に、日本の近代化を多面的・多角的に考察している。(B)
まとめ (10分)		・本時の授業内容や他の生徒の意見も参考に自分の考えを文章でまとめて提出。	・机間指導で助言する。	

令和4年度 指導主事学校訪問 研究授業研修会

○日時時間…令和4年10月18日(火)6校時

○場所………1年C組教室

○研究授業…歴史総合

○対象クラス…1年C組33名

○授業者……教諭 山内 孝太

○助言者……高校教育課指導主事 鈴木 亮 先生(地歴公民科)

○1か月前課題

主体的な活動を支援する授業展開の工夫～発問、ICT機器の効果的な活用の実践から～

○授業者より

歴史総合という新しい科目であり、正直いまだにどのような授業をすればいいのかわからず模索している段階です。今回の授業は、指導要領でも提示されている資料の活用と国家間の比較に重点を置いて作成しました。憲法の比較から近代化の違いを考察するという、このクラスの生徒達にとっては難しい内容かとも思いましたが、想像以上に活発に話し合いが行われており、正直驚きました。ICTに関しては意見を共有する手段として活用しましたが、私自身勉強不足などもあり、少々見づらくなってしまいました。今後、試行錯誤しながらより適切な機能と活用場面を探究していきたいと思います。

○参観者より

ICTを効果的に利用し、生徒の主体的な取り組みにつなげることができていた。しかし、ICTを活用しすぎると生徒が全体の前で話す機会が失われることもある。ICTに頼りすぎず、バランス良く活用することが大事であると感じた。

○指導助言

歴史総合は今年度から始まった科目であり、地理歴史科の転換点とも言える。学習指導案の作成方法にも若干の変更がある。学習指導案の作成には、国立教育政策研究所の「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料をぜひ参考にしてほしい。歴史総合の内容はボリュームが多く、2単位での対応は非常に厳しいため、年間指導計画が大事になってくる。単元を貫く問いを計画的に準備する必要がある。

共通テストでは、生徒が初めて見るような資料を、今までの学習で得た知識を生かして答える問題が多くなっている。共通テストを生かした授業改善に取り組んでほしい。

こうした授業研修会は、校内で授業のことを話し合うことができる良い機会である。今後は校内にとどまらず、他校や他県の授業等も是非見てほしい。また、中学校の授業参観を行うことで、1年生への授業のアプローチを変えることができるかもしれないので、機会があれば参観してほしい。

本日の授業についてであるが、非常に面白い視点での授業展開であった。生徒の深い学びにつながる問いもあった。ICTの利用については、どこで利用することが効果的なのかを試行錯誤しながら研究してほしい。他教科であっても、本日の授業を参考に自分自身の授業にも取り入れてほしい。

英語科 「コミュニケーション英語Ⅲ」学習指導案

日 時：令和4年10月18日（火）6校時

場 所：角館高等学校 3年F組教室

対 象：3年F組

授業者：大塚 繁太郎、

チャールズ・バンボーガンディエン

教科書：Element English Communication III（啓林館）

1 単元名 Scientific Essays Discourse Navigator 5

2 単元の目標

(1) ペーパーブックとデジタルブックについて、他の生徒と情報を共有することができる

【 コミュニケーションへの関心・意欲・態度 】

(2) スライドを作成し、ペーパーブックとデジタルブックの良し悪しについて語ることができる

【 外国語表現の能力 】

(3) ペーパーブックとデジタルブックについて理解し、整理することができる【 外国語理解の能力 】

(4) ペーパーブックとデジタルブックの影響が社会に与える影響について理解する

【 言語や文化についての知識・理解 】

3 単元と CAN-DO 形式での学習到達目標との関連

メモを取りながら、グループや自分で調べたことを集約し意見を述べ、英語で発表することができる。

4 単元観 比較・対照のパラグラフ展開を理解し、何と何が比較・対照されているかを読み取れるようにし、文章の要点を読む習慣を身に付ける。

5 生徒観 3F文系クラス 33人（男子16人、女子17人）

コミュニケーションを意欲的に取り合い、発表やディスカッション等に主体的に取り組むことができる。進学を目指している生徒が多く、情報を読み取る力や文章をまとめる力は学年全体では高い方である。今後は文章を短い時間で読む力を身に付けさせたい。

6 単元計画（総2時間）

1時間目… ペーパーブックとデジタルブックの違いについて本文の内容や自分の考えを整理し、プレゼンテーションを行う。（本時）

2時間目… リスニング活動や音読活動を行い、知識・情報の定着を図る。

7 単元の評価規準

A コミュニケーションへの関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
ペア・ワークやグループワーク、プレゼンテーション活動に積極的に取り組んでいる。	まとまった量の文章を読んで、概要について口頭で説明できる。	まとまった量の文章を聞いたり読んだりして、概要や要点を的確に理解できる。	既習事項を基にデジタルブックの社会的影響について友人と話し合い理解できる。

8 本時の学習

(1) 本時の目標

ペーパーブックとデジタルブックの良し悪しを整理し、自分の考えを加えながらスライドを用いて英語で発表できる。

(2) 指導計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 10分	1 分間スピーチ ① トピックに対する自分の考えを英語で述べる。 ② 相手のスピーチの語数を数える。 ・準備 5分 ・スピーチ 1分×4	・ AREA を意識するように指示を出す。 ・ ペアを変えて、新しい考えに触れる機会を作る。 ・ 語数を数え、どのくらい話せているかを数値化させる。	
	(トピック) Which do you like better, paper books or digital books?		
展開 10分	Listen & Talk (5) ・ Text の音声を聞き、内容を聞き取る。 ・ ペアで話し合い、内容を確認する。	・ メモを取り、話し合うように指示を出す。 ・ 概要についてまとめるようにする ・ リスニングをより円滑にできるように何枚か写真や絵を示す。	
	単語のインプット (5) 単語シートを用いて、単語のインプットと単語を使った発話活動を行う。	スピーキングパスポートを活用し、意欲的にスピーキングを行う環境を作る。	
展開 37分	スピーチ原稿の作成 (ペア活動) ① 文章を読み、ペーパーブックとデジタルブックの違いを理解しスピーチシートを作る。(10) ② ①で完成したスピーチシートに、自分の考え、もしくは、インターネットで調べた新しい内容を加え、スピーチシートを完成させる。(8) ③ スライド作成 (7) 発表で使うスライドを作成し、プレゼンテーションの準備をする。	・ スピーチシートを作る。 スピーチをすることを意識させる。 わからない語句等を調べさせるが、あくまでも即興で行うように、キーワードのみを拾い上げるように指示を出す。 ・ スライドは2つまでにするように指示を出す。 ・ 机間巡視して、生徒のアイデアを引き出すように支援する。	C
	<プレゼンテーション> ・ 90秒×4 (ペア) ・ 友人の前で発表する。 ・ クラスの前で発表してくれる人を募る。	・ スピーチの際、原稿からできるだけ目を離すことを強調する。 ・ 自由に話してもよい雰囲気を作る。 ・ スピーチの間に修正の時間を設ける。 ・ 友人の発表を評価させる。	B
まとめ 3分	まとめ ・ 本時で学んだことや自分で感じたことを英語でまとめる。	・ ワークシートに書いて、提出するように指示する。	

令和4年度 指導主事学校訪問 研究授業研修会

- ◇ 日時時間 . . . 10月18日(火)
- ◇ 場 所 . . . 3年F組教室
- ◇ 研究授業 . . . 英語(コミュニケーション英語Ⅲ)
- ◇ 対象クラス . . . 3年F組
- ◇ 授 業 者 . . . 大塚繁太郎先生 ALT チャールズ・ヴァンボーガディエン先生
- ◇ 助 言 者 . . . 指導主事 深沢志保 先生

授業者から

常日頃からアウトプットに重きを置いて、プレゼンテーションやディベートにつなげる活動をしている。今回は prefer A to B, tend to do の表現を使うよう仕掛けをして授業に臨んだ。個人の力を授業でどのように伸ばしていくかを常に考えていて、リスニング→ペアワーク→リーディングで情報を得る、の流れにたどり着いている。毎回何をターゲットに組むのか準備が大変だが、授業では生徒に活動を指示するだけなので授業者はラクであり、寝てしまう生徒はいなくなる。常日頃から google 翻訳に日本語を入れないことを約束ごとにして、タブレットは常に使用可能な状態にしている。

参加者から

3年生でも声が大きく、楽しそうに授業を受けている。大塚先生の指示が的確で、前向きなコメントを多用しながら授業が進んでいる。重要語句の復習の仕方がテンポよく、パワーポイントで効率よく進められている。リーディングではなく、リスニングによってテキストの内容についてメモを取らせ、ペアで話し合い、概要をまとめて内容を確認し合うことが斬新だった。同じトピックについて同じものを読んで、なのでグループごとに A と B を比較させると「情報共有」としてはさらに良い活動になると思う。

指導主事から

以前から大塚先生の授業を拝見したいと思っており、今日拝見できたことがとてもうれしく思った。ALT の先生の活用としても、生徒たちによりフィードバックを与えていた。

「生徒の活動」ありきの「活動」で、生徒の意欲がおおいに感じられた。見通しのある活動で、間違いを気にせず、発表した生徒の中には、教壇で長い時間立って話している生徒がいたが、そうさせてくれる教室の雰囲気も良かった。

最後のスピーチでは先生からのほめるフィードバック以外に、文法や表現のエラーを生徒に気づかせるような指導でチャールズ先生をうまく活用してほしかった。フィードバックの仕方をきめ細やかにしてもいいと思う。

保健体育科「体育」学習指導案

日 時：令和4年10月18日（火）6校時
 実施場所：角館高等学校第一体育館・第二体育館
 指導者：田口 忠廣 藤木 剛 原 雄太（角館高等学校）
 対象生徒：2年CD組 68名

1. 単元名 選択球技（ゴール型：バスケットボール ネット型：バレーボール、卓球）

2. 単元の目標と評価規準

- 【目標】ア. 勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めて、ゲームが展開できるようにする。（技能）
 イ. 球技に主体的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。（態度）
 ウ. 技術などの名称や行い方、体力の高め方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解し、チームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。（知識、思考・判断）

【評価規準】

関心・意欲・態度（A）	思考・判断（B）	運動の技能（C）	知識・理解（D）
- 球技の学習に主体的に取り組もうとしている。 - 役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 - 合意形成に貢献しようとしている。 - 互いに助け合い高め合おうとしている。	- 課題解決の過程を踏まえて、取り組んできたチームや自己の目標と成果を検証し、課題を見直している。 - 作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための調整の仕方を見付けている。	- ゴール型では、空間への侵入などから攻防を展開するための状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの動きができる。 - ネット型では、空間を作りだすなどの攻防を展開するための状況に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きができる。	- 技術などの名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 - 課題解決の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。

3. 単元計画（本時7時間目／10時間）基本練習3、課題練習3、ゲーム4

4. ①. バレーボール：本時の計画

- (1) 本時の目標：3段攻撃ができるように、練習やゲーム、話し合いに積極的に参加することができる（関心・意欲・態度）
 (2) 生徒の実態：基本的な技能に個人差はあるものの、バレーボール経験者がリードしながら楽しむことができる。
 (3) 学習の展開（55分）

	学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
導入 8分	- 集合、挨拶、準備運動をする。 - コート設営と用具の準備をする。 - 本時の目標と展開を確認する。	準備運動を確実に行わせる。	
展開 40分	- 円陣パス、三角パスの練習をする。 - ゲームを行う。 - チーム毎に試合の動画を確認し、目標に対しての振り返りをする。その際、良かった点と課題について話し合い、ジャムボードに入力する。 - ゲームを行う。	- 安全に留意させる。 - 空いているチームの人は、審判や動画の撮影などの役割をするように伝える。 - 積極的に話し合いに参加させ、意見交換させる。 - 反省点を生かしたゲームを行わせる。	【関心・意欲・態度】（A） 3段攻撃が続くように、仲間と協力し、積極的に練習とゲームに取り組んでいる。 - 話し合いの中で、積極的に意見を出している。（観察評価）
整理 7分	チーム毎に本時の振り返りをする。	チーム毎に本時の振り返りをさせ、全体の場で発表させる。	

4. ②. バスケットボール：本時の計画

(1) 本時の目標：積極的に、パス練習を生かしたゲームに取り組む（関心・意欲・態度）

(2) 生徒の実態：運動能力が高い生徒が多く集まっており、仲間と協力し合いながら積極的に取り組むことができる。

(3) 学習の展開（55分）

	学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
導入 8分	・集合、挨拶、準備運動をする。 ・用具の準備をする。 ・本時の目標と展開を確認する。	・準備運動を確実にに行わせる。	
展開 40分	・シュート練習をする。 ・パス練習をする。 （ツーメン2回、スリーメン2回） ・簡易ゲーム（5班）を行う。 ・用具の片付けを行う	・シュート練習を行わせる。 タブレットを利用して、自分のフォームを各自、確認させる。 ・パス練習を行わせる。 ・安全に留意させる。	【関心・意欲・態度】（A） ・互いに協力して練習に取り組んでいる。 ・身につけた技術を生かし、積極的にゲームに参加している。 （観察評価）
整理 7分	・チーム毎に本時の振り返りをする。	・チーム毎に本時の振り返りをさせ、全体場で発表させる。	

4. ③. 卓球：本時の計画

(1) 本時の目標：ペアで協力してラリーを続け、ダブルスのゲームを楽しむことができる（関心・意欲・態度）

(2) 生徒の実態：球技が苦手な生徒もいるが経験者が多いクラスであり楽しみながら攻防を展開することができる。

(3) 学習の展開（55分）

	学習活動	指導上の留意点	評価（方法）
導入 8分	・集合、挨拶、準備運動をする。 ・本時の目標と展開を確認する。	・準備運動を確実にに行わせる。	
展開 40分	・ストローク練習をする。 ・サーブ、サーブレシーブを練習する。 ・簡易ゲームを行う。 ・試合の動画を確認し、個人の技能、チームの動きで良かった点と課題を話し合う。また、それを、タブレットに入力する。 ・簡易ゲームを行う。	・フォアハンド、バックハンドのストローク練習を行わせる。 ・安全に留意させる。 ・空いている人は、審判、得点、動画の撮影の役割をするように伝える。 ・積極的に話し合いに参加し、自己や仲間の良かった点や課題について意見交換させる。 ・反省点を生かしたゲームを行わせる。	【関心・意欲・態度】（A） ・ラリーが続くように、互いに協力してゲームに取り組んでいる。 ・話し合いの中で、積極的に意見を出している。 （観察評価）
整理 7分	・本時の振り返りをする。	・本時の振り返りをさせ、全体場で発表させる。	

令和4年度 指導主事学校訪問 研究授業研修会

- ・日時時間・・・10月18日(火) 15:45～16:25
- ・場所・・・多目的室
- ・研究授業・・・選択球技
(ゴール型：バスケットボール ネット型：バレーボール、卓球)
- ・対象クラス・・・2年CD組
- ・授業者・・・田口忠廣先生 藤木剛先生 原雄太先生
- ・助言者・・・保健体育課指導主事 佐藤 幸彦 先生

授業者から

原 先生：1か月前課題である主体的な活動に向けては3つのことを工夫してきた。1つ目はルールの工夫である。通常のバレーボールコートで試しのゲームも行ってきた。しかし、技能にばらつきがあり、つながらないことが多かった。そこで、試合でのルールについて、生徒に問いかけながら進めてきた。例えば、試合中にワンバウンドすることを認めるとラリーが増えるため、「今日は1回までにするか？」など、生徒に問いかけながら進めてきた。2つ目はチーム編成である。女子生徒も非常に多く、運動が得意な生徒苦手な生徒の二極化がみられ、チーム数を多くしていろいろな人と交流することを心がけてこまめにチーム替えを行い、チーム編成に気を配った。3つ目は場の工夫である。ソフトバレーボールを用いてコートを3面つくることで活動量も多くなるので活用した。前時に特に苦手だったスパイク動作についてタブレットを活用した。自分のスパイクの動作を動画で撮影し合い、各チームにいるバレーボール部員や経験者にアドバイザー役になってもらいアドバイスをしてもらった。実際に自分の動きを動画で確認することで、より自分の課題が見え、主体的な活動につながったのではないかと思った。課題としては、動画の撮影と振り返りには、ある程度の時間が必要となり、運動時間が少なくなってしまうことだと思った。本時は、その反省を生かして指導案を変更し、試合のない空きチームの撮影をなくしている。それにより、動画による振り返り時間を保ちつつ、前回よりも多くのゲーム数を実施することができ、運動時間も確保できたと思う。

藤木先生：運動することが好きな生徒がバスケットボールを選択し、ボールに向かってまっすぐに進んでいくというプレーが多く見受けられ、ただバスケットボールをしているという印象があり、手を差し伸べたらすぐよくなるのではないかと思った。1か月前課題として、ボールに集まるプレーの解決と個人的技能の向上をねらいとし取り組んできた。ボールに集まるプレーを解決するための支援として、スリーメンパスを横に広げて、広げること

よって今後の授業において今後の授業ではスクリーンプレーなどで相手の進路を妨害しながらゲームを組み立てられるようにさせたいという大事である。集団的技能に結びつけるためには個人的技能が大切であり、そのためにタブレットを活用しながらシュートが成功したときと失敗した時の動作、さらには3ポイントシュートにおいてもタブレットを使用しその動作の違いを生徒に理解させ修正できるように取り組ませてきた。女子生徒にバスケットボールの経験者が多くコートを幅広く使用してゲームができるが、特に男子は直線的な動きが多く意識させて取り組ませることによって動きに変化がでるようになった。残り3時間の授業でさらに変化させたい。

田口先生：1か月前課題として、自分たちで課題をみつけて考えて行動できるためにはどうすればいいのか考え授業に取り組んできた。卓球経験者と苦手な生徒との二極化がみられるため、卓球経験者を指導者役としてグループを編成した。打ち合いでは、指導者役の生徒が苦手な生徒に教える場面を設定し授業を行ってきたが、ラケットにボールを当てることはできるようにはなったもののなかなか上達がみられなかった。「なぜうまくいかないだろう」と生徒へ問いかけたところ、「打とうと思っても当たらない」、「方向が違う」、「ネットにかかる」といった返答があった。なぜそうなるのかということから話を始め、タブレットを使用し自分のフォームを動画で撮影して、撮影したフォームを見ながらラケットの向きやどのように動いているのかを動画を確認させて、苦手な生徒に対して私も含めグループの指導者役の生徒にも改善点について助言してきた。タブレット操作について面白い場面も見受けられ、運動が苦手な生徒の方が動画に気づいたことや改善点など書き込みする方法を知っており、得意な生徒に教えたりしていた。

参観者から

・原先生の授業のながれの指示は丁寧でわかりやすかった。ソフトバレーボールで、バウンドありのルールへの変更で三段攻撃へと結びつける授業がなされていた。空き時間なく展開することができ、バレー部をグループに入れることでボールに触れる機会を増やすといったやり方の工夫が生徒の主体的な活動に繋がっていた。また、タブレットを活用し、課題を言葉にして見ることによって、やるべきことがより明確になり、最後には自然と盛り上がってハイタッチする姿もみられ、さらなる主体的な活動につながったと思う。タブレットを見ている時間が少し長いように感じた。慣れてくれば時間は短くなると思うが工夫が必要と思った。最後の振り返りも次時につながるように生徒に積極的に発言させていた。最後はバレーボールに戻したいということだったので、今後うまく繋げて授業をしてもらいたい。

・タブレットを活用してみて自分のどのようなところが技術の向上に繋がっているか生徒に聞いたところ、バスケットボールでは、シュートフォームが上手だと思い込んでいたが映像をみると下手で思い込みを直すのに気づかされたとのことであった。卓球では、上手にできた時

とできなかったときの違いを検証して自分の上達に向けて役立っていると話をしてくれた。バレーボールでは、自分がそういう体の使い方をしているのか意識してバレーをするようになり、できなかった時ももう少しで自分の目標に近づくことができ意欲が湧いてきたと話をしてくれた。ICT の活用が自分をもっとこうしたいと思える主体的な活動に繋がっており、藤木先生の授業では、さらにブラカードで生徒に意識してもらいたいところを見せていたので、頭で理解していても向上に繋がられないところを見える化することで発問と ICT の面を主体性に繋がる取り組みがなされていた。

・発問に関しては、指示の出し方など生徒に伝わりやすい明確な簡単な指示で全体に伝わるように工夫されていた。タブレットに関しては、その場で自分のフォームに気づかせ、その場で反省させ次に活かせることで体育ならではの使用ができていた。

指導主事より

ICT の活用については、使用することが目的ではなく、3つの資質の何を育てるための方法なのかを考えて実践してほしい。今日の授業は、動画を言葉にして関わりをもって取り組んでおり、技能の向上に繋がる授業であった。ぜひ今後の授業に繋がってほしい。指導案の作成について、研究授業になると参観する人のためにもなるので、自分たちの授業を振り返るためにも大切なものになる。一目瞭然とまではいかないかもしれないが、分かるように作成しておくことが重要である。そのためには単元計画が大切であり、今日の授業は10時間分の7時間目の授業であったが、参観者にもこれまでどのような事をやってきたかといったこれまでの授業の流れが分かるようにしてほしい。単元計画をしっかり立てることで、生徒にどのような力を身に付けさせるかといったねらいが明確になるので、今後の授業に活かしてほしい。